

『少年と犬』

2020年10月12日

私は文学的センスに乏しい。だから時々、小説を読まなければならないと、芥川賞や直木賞や本屋大賞を取った小説を読むように心がけている。芥川賞は『文藝春秋』に掲載されているので、毎回読んでいます。若者像を描いた作品が多い。その若者たちは感性が鋭く、刹那的で、虚無感を宿した人が多いようで、これが、今の若者なのかと思わされる。最近の直木賞では、『熱源』の壮大さに感銘をもって読んだ。アイヌの青年が主人公で、彼を取り巻く人々は皆、差別と抑圧を受けているが、自分の生き方を貫き通して、逞しい。彼らに共感する自分を、つくづく古い人間だと思ってしまう。

今年の直木賞の受賞作は、馳星周氏の『少年と犬』である。岩手県の釜石市が津波に襲われ、飼い主と別れた「多門」という犬が、九州の熊本まで、旅する物語である。その途中、犯罪に関わった男、宝石店を襲った窃盗団の男、冷え切った夫婦、娼婦、すい臓がんが死期を迎えた人などと出会い、飼われる。多門は人間の心が読めて、彼らを助け、支え、励ます、ずば抜けて賢い犬である。多門は傷つきながらも、懸命に生きて、熊本まで辿り着く。そこで、釜石の津波のために移住してきている家族と出会い、飼われる。その家族には、津波の恐怖で失語症になった少年がいた。少年は多門に親しみ、多門は少年を愛し、少年は心をほぐされ、徐々に言葉を回復していく。多門の体に埋め込まれたチップから、釜石で飼われていたが、飼い主は津波に流されて死んだこと、また、釜石の公園でその少年と遊んだ犬であることが分かった。多門は、その少年を求め、会うために熊本まで来た。感動的な再会であることを知らされた。ところが、熊本を地震が襲い、多門は少年を守って、自らは傷つき死んでしまう。『少年と犬』は童話である。多門と出会った人々は皆、一癖ある人で、大人を対象にしているが、涙を誘う童話である。

私の子どもの頃、わが家は犬と猫を飼っていた。犬は放し飼いであった。小犬でもらわれて来た時、必要もないのに、針金で首輪をした。大きくなった時、針金が首に食い込んでいるのを見て、私はあわててペンチで切ってやった。以来、私と犬は大の仲良しになった。現在は、小動物が老人ホームや子ども病院で、癒しの働きをしていることを聞くようになった。教会員のH. H氏が老人ホームで働いており、訪ねたことがあった。彼は犬をホーム内で飼い、入居者たちの憩いの仲間としているのを見て、なるほどと思った。

わが家の猫が隣の家の鶏の雛を襲って食べたとき、苦情が来た。父は猫を激しく折檻していた。石牟礼道子氏が『花びら供養』の中で、下記のように書いていた。盲目の祖母のお膳に、猫が抜き足差し足で近づき、ぱくりと鰯を啜った。父が猫の首を掴み、「めくら様の皿に手を出したな、なんちゅう卑しか精神ぞ、このアホが」と怒鳴りつけ、鼻を畳にすりつけた。以後、その猫はめくら様の皿には手を出さなくなった。猫は犬と違い、人間の言葉が聞き分けられるものか、と思った。ある女性からこんな話を聞いた。自分は聞いたことのないような優しい夫の話し声が聞こえた。誰と話しているのかと見ると、相手は猫であった。ペットが家族のように飼われていることは理解できる。しかし、最近のペットブームは異常なところがあるのではないか。聖書では、神が人を創造した後、「人が独りであるのは良くない。ふさわしい助け手を造ろう」と言われ、野の獣、空の鳥などを連れて来たが、助け手にはならず、女を造ったと書かれている。人間はペットでなく、人間を相手にするように造られている。人間との付き合いに疲れ、失望し、言うことを聞くペットに入れ上げているのではないか。『少年と犬』は人間より犬の方がまともだと描いている。